

群 教 七	G01 - 02
	平25.251集
	小・国

事実、感想、意見などを 区別して表現できる児童の育成

—児童の気づきを引き出すための
二つの例示を比較する活動を通して—

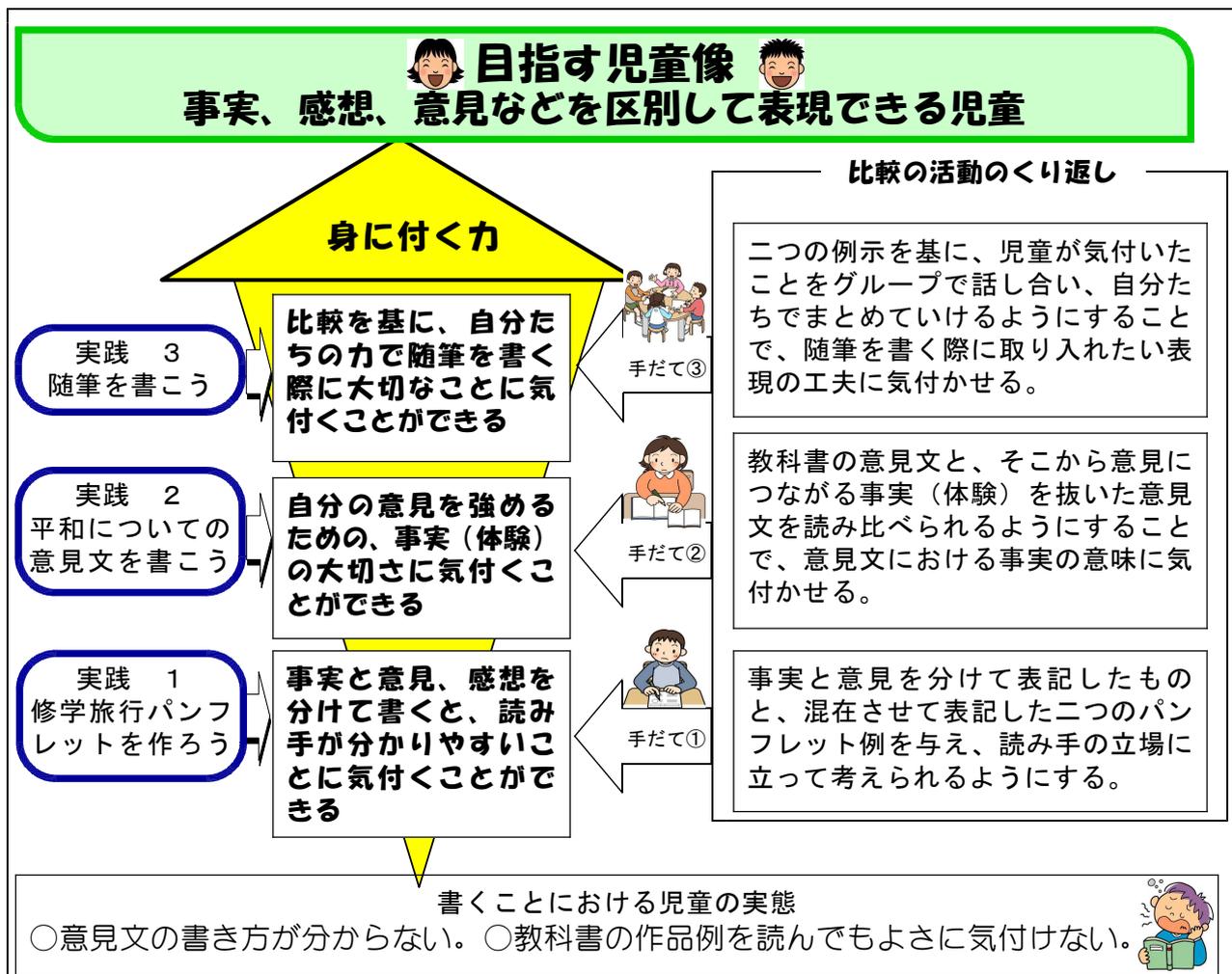
特別研修員 鳥塚 嘉紀

I 主題設定の理由

本学級の児童の多くは、意見文を書くことに苦手意識をもっている児童が多い。また、書かれた作文を読むとやったことの羅列だけであったり、自分の気持ちの根拠が明確になっていなかったりするものが多く見られた。作文の書き方を指導していく中で、教科書に載っている作品例を読んでも、書く意欲やねらいとする観点への気づきにつながらない様子が見られた。

そこで本研究では、意見文や随筆を書く活動の際に、教科書の作品例だけでなく、そこから児童に気付かせたい部分を抜いた例示を作成し、二つを比較する活動を取り入れることで事実、感想、意見を区別することのよさに気付けるようにしたいと考える。また、自らの気づきによって大切な点を理解できるようにすることで、書く意欲が高められるとともに、書く活動におけるねらいが明確になり、事実、感想、意見などを区別して表現できる児童の育成に有効であると考え本主題を設定した。

1 研究構想図



2 授業改善に向けた手だて

事実と意見を区別して書ける児童の育成のために「意見文を書く」「随筆を書く」といった二つの書く単元の導入の場面で教科書の例示と自作の例示を比較する活動を取り入れた。

単元「『平和』について考える」（第6学年・2学期）において、意見文を書く活動の初めに、色分けをして文章構成を理解する活動や比較を通して意見文を書く際に大切な点を見付ける活動を位置付け、以下の点に留意して実践を試みた。

—— 実践2における研究上の手だて ——

- 教科書の作品例から事実の部分抜いた例示を提示し、元の文と読み比べて、児童が意見文における事実の役割について考えられるようにする。
- 反論の役割について、平易な二つの例文を比較してその効果について考えられるようにする。
 - ・教科書の作品例を事実・意見・反論といった内容ごとに色分けを行う。

構成の色分けや、二つの例示の比較によって児童は意見文を書く観点に気付くことができた。比較から気付いたことを全体で確認し、最後は教師が主導で身に付けさせたい観点をワークシートにまとめた。

そこで、単元「自分を見つめ直して」（第6学年・3学期）では児童の気づきをさらに生かしていけるよう手だてを改善した。

—— 実践3における研究上の手だて ——

- 二つの例文を比較して、気が付いたことを基にグループで話し合う場面を設定し、随筆を書く際に取り入れたい表現の工夫や効果について、児童自身の言葉でまとめられるようにする。
- 児童がねらいとする観点到気付き、その気づきを基に話し合えるように、二つの例文に波線を引いたり番号を付けたりした資料を提示する。
 - ・ホワイトボードを活用し、グループでまとめた意見を全体に提示しやすいようにする。

本単元で児童は初めて随筆という作品に触れ、自分自身で随筆を書く活動を行う。自分で随筆を書く前に、随筆の文章構成や表現の工夫を理解することがねらいとなる。実践1の考察を踏まえ、グループでの話し合い活動の充実を図った。ホワイトボードを活用し、気付いたことをまとめる活動を行うことで、児童の自発的な気づきにつなげることができた。

Ⅲ 研究のまとめ

1 成果

- 二つの文章を比較することで、児童が文章を書く際に目指す部分が明確となり、「意見に対する事実を入れて書こう」「随筆的な表現を工夫して書こう」といった単元の目標を達成することができた。
- 二つの文章を比較しながら児童が自分で大切な観点到気付きすることで「自分もよい例のように書きたい」という意欲の高まりにつなげることができた。

2 課題

- 比較用の例示文を自分で作成する際に、比較する部分が明確になるように波線や番号を付けて提示することが大切である。
- 例示を比較して気付いた大切な点を「意見文（随筆）を書く際のチェック表」という形にして、児童がいつでもその観点を意識して書き進めていけるようにすると気づきの効果が持続する。

3 比較からの気づきをさらに生かすために

書きあがったものを推敲したり、グループで読み合う際にも活用したりするというように、作文を書いているときだけでなく単元の活動を通して活用していくとよい。

IV 実践及び改善の実際

実践 2

1 単元名 「平和」について考える (小学校第6学年・2学期 光村図書)

2 本単元及び本時について

本単元は平和についての意見文を書くという言語活動を想定した単元である。本時は全17時間計画の第4時にあたり、教科書の意見文の例を基にして、自分の意見が伝わるような意見文の構成を理解することがねらいとなる。「意見に対する事実を入れる」「反論を取り入れる」といった、児童が意見文を書く際の観点を明確にしてから書き出せるように、教科書資料のように事実と意見が織り込まれた文に対して意見だけの文や反論を入れた文と入れていない文を例示し比較できるようにする。実際に意見文を書き出す前に、意見に説得力をもたせるには具体的な資料や実際にあった出来事などの「事実」の必要性や、意見を強める「反論」の効果を学ぶために次のような手だてを具現化した。

3 授業の実際

導入においては、教科書の意見文を「赤…筆者が最も伝えたい意見」「緑…自分の体験」「黄…反論とそれに対する答え」というように内容によって色分けし、キーワードを考えながら構成メモへとつなげていくことで、意見文全体的な文章構成を確認した(図1)。児童も実際に色紙を使って構成メモを作成していくことで、意見文に入れるべき内容を理解することができた。

その後、教科書の意見文の例とそこから意見の根拠となる事実を抜いた資料を配付し、読み比べてどんなことに気付いたかを発表させた。

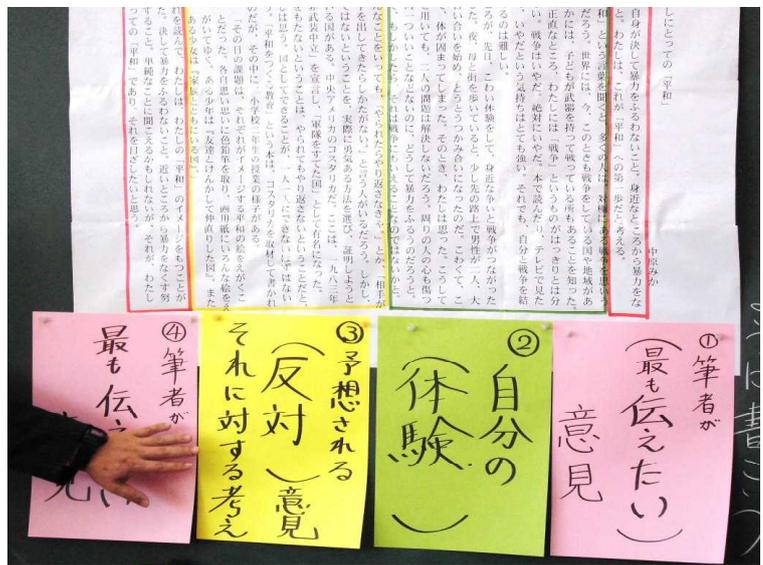


図1 教科書の拡大提示と内容ごとに色分けした構成メモ

二つの意見文を比較する活動の様子

活動① 意見文における事実の意味を考えさせる活動 (Tは教師、Sは児童)

T: それでは、教科書の意見文に加えて、もう一つ意見文を用意したので読んでみましょう。

S1: 教科書の作文に似ているけれど、少し短くなっているなあ。何が違うんだろう?

T: 先ほど教科書の作文を内容ごとに色分けしましたが、この文も色分けしてみましょう。

S2: この作文は赤(意見や感想)ばかりだ。緑(事実としての体験)が全然ないなあ。

T: そうですね、今渡した作文は、教科書の作文から、作者の体験を抜いてあります。読み比べてみて事実を抜いた意見文と事実(自分の体験や本の資料)を加えた意見文を比べると、筆者の意見の伝わり方にはどんな違いがありますか。

S3: 自分の体験や資料が入っていないと、読んでいて筆者がなんでそう思ったのかが分からなくて、意見に説得力がないように感じたなあ。

T: S3さん「説得力」というのはいい言葉ですね。自分の意見を相手に伝えるには、意見ばかり並べても伝わらないことが分かりましたね。

活動② 意見文における反論の効果を考えさせる活動

T: 教科書の意見文には「反論」という部分がありますが、反論があるのとないのではどんな違いがありますか。

実践3

1 単元名 自分を見つめ直して ～随筆を書こう～ (小学校第6学年・3学期 光村図書)

2 本単元及び本時について

本単元は随筆を書くことで自分を見つめ直す機会にするという言語活動を想定した単元である。本時は全8時間計画の第2時にあたり、教科書の随筆の例を基にして、随筆の表現の工夫を理解することをねらいとしている。児童にとっては初めて随筆を書く機会となるため、随筆とはどのような構成であるかを確認するとともに、随筆に用いられる表現の工夫に気付かせるために次のような手だてを具現化した。

3 授業の実際

導入においては、前時に学習した「印象に残った出来事+今の自分にとっての意味」という随筆の構成について確認をした。随筆を児童に比較させる際には、教科書の作品例のよさに気付けるように、教科書の作品例から随筆的な表現を抜いたものを先に配付し読めるようにした。また、教科書の作品例に波線と番号を付けたものを提示することで比較する部分が明確になるようにした。

各自で二つの随筆を比較する活動の様子

活動① 随筆における表現の工夫を見付ける活動

T: それでは、最初に配った随筆と教科書の随筆を読み比べて、抜いた文があるのとないのでは読んでみてどんな違いがあるのかを考えてみましょう。

S1: あれ、抜いた方には筆者がそのとき感じたことが書いていないなあ(図3)。

S2: 書き出し部分が空き缶が転がる音から始まっている。そうすると「何があるんだろう？」って先が読みたくなるな。

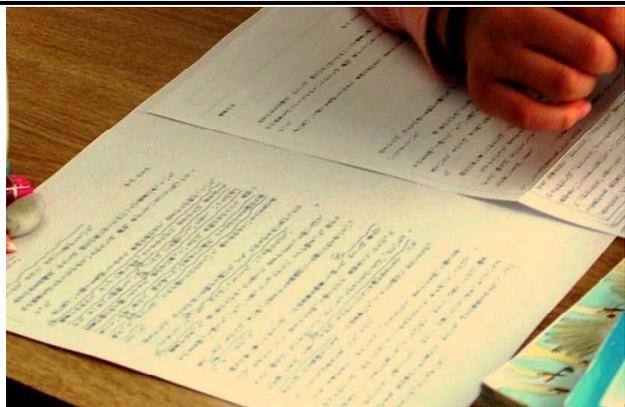


図3 二つの随筆を比較する様子

まずは、一人一人が自分の考えをしっかりとめるような活動の時間を確保した。グループでの発表の際に、自分の考えが言えるようにワークシートに発表の方法の型と発表例を載せておいた(図4)。

児童は、二つの文章を読み比べながら、気付いたことを例示資料にメモしていた。違いを見付けても、どのように発表してよいか戸惑っている児童には声をかけ、教師が問いかけてそれに答えていくことで気付いた点を整理させていった。

グループでの活動では、司会者を中心に各自が見付けた部分を発表し合い、その中から「自分たちがいいなと思った表現の工夫」をまとめ、ホワイトボードに書いて発表した。

自分を見つめ直して、ワークシート名前()
随筆の表現の工夫を見つけて、その効果を考えよう。
一、二つの随筆を読み比べて随筆の表現のよさを見つけてよう。(二人一組グループで)

発表する時やまとめる時は
○○○(表現の工夫)すると、□□□(読み手が感じるよさ)になる。
○○○(表現の工夫)していることが、□□□(読み手が感じるよさ)になっている。
○○○(表現の工夫)があると、□□□(読み手が感じるよさ)がある。
○○○(表現の工夫)があるようにしよう。

(例)「電車の「わたし」というように題名にかまが、こをつけて「わたし」と書いていることが、自分自身を見つめている内容につながっている。
「電車の「わたし」と書いてあると、「どんな内容だろう」と興味「がわく」」

まずは、線を引いた部分の表現のよさを見つけてよう。
次に、見つけたよさやどう感じたかを、グループで発表し合おう。
最後に、発表し合ったことをもとに、ワークシートに見つけた表現のよさをまとめよう。

図4 発表方法の型

比較して見付けた工夫を基に話し合う活動の様子

活動② グループで発表し合い、意見をまとめる活動(図5)

T: それでは、グループになって自分が見付けた表現の工夫を発表し合ひましょう。ワークシートに発表の例があるので参考にしましょう。

司会: それでは、S1さんお願いします。

S1: 私は、教科書の方には場面ごとに筆者の気持ちや考えたことが書かれているのを見付けました。

場面ごとに、気持ちが書いてあると、そのときはこう思っていたんだというのが分かっていいです。

司会：同じ部分を見つけた人はいますか。

S2：自分もそこは気付いたけれど、どんなよさがあるかは分からなかったの、なるほどなと思いました。

司会：他に気付いた部分はありますか。

S3：電車の中の様子を詳しく書いているから、読んでいて分かりやすいです。

T：S3さん「詳しく書いてあるから分かりやすい」って具体的にはどんなことですか。

S3：電車に子どもや、お年寄りもいる中で、高校生が空き缶を拾ったっていうことを筆者は伝えたいんだと思います。

T：それでは、出た意見を基に「どんな表現を使えばいい随筆になるのか」をホワイトボードにまとめましょう(図6)。

～各グループの代表が発表をする～

S4：書き出しを工夫すると、読み手が最後まで読みたくなると思いました。

T：最後にワークシートに、自分が随筆を書くときに使ってみたい表現方法をワークシートに書きましょう。

S5：文章の長さを工夫したり、場面に合った表現の工夫を取り入れてみたいな。

T：では、次回から自分たちで見つけた工夫を取り入れて、随筆を書いていきましょう。



図5 グループでの話し合い

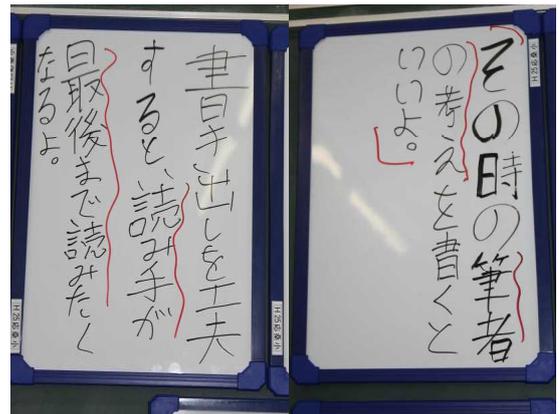


図6 ホワイトボードを活用したまとめ

実践2の際には、児童の意見を教師の方で共通の観点としてまとめをしたが、本実践では「随筆の書き方を教わる」というのではなく、与えられた資料を基にし、自分たちで大事なことを見付けていく活動だったので、主体的に取り組む姿が見られた。また、グループ活動を取り入れたことで個人では気付かなかった表現の工夫について、気付くことができワークシートにまとめられていた(図7)。

<児童の随筆作品に見られた工夫>

- 「やります」その一言で、運動会本番まで残りわずかというとき、私はソーランリーダーをすることになった。(書き出しの工夫)
- 自然と冷たい汗をかいていて心臓が飛び出そうなほど鼓動は速かった。(緊張を表す表現の工夫)

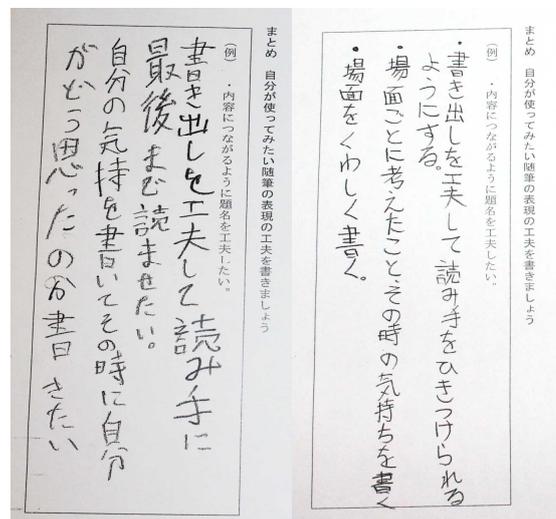


図7 使ってみたい随筆的な表現の工夫

4 考察

教科書の作品例を基に同じ形で随筆的な表現を除いた例文を作成し、波線や番号を付けたことにより、児童の比較する活動が焦点化されていた。例示を作成する際には、ねらいを明確にして、見比べた際に分かりやすいものを作成することが大切である。また、個人で気付いたことを基にグループでの話し合いを行うことで、一人で読んでいた際には表現の工夫に気が付かなかった児童も、考えを深めることができていた。「自分たちで見つけた随筆的表現を取り入れて随筆を書いていきたい」という声が聞かれ、書くことへの意欲の高まりを感じることができた。